

中・上級日本語学習者の漢字表記上の問題について

深見兼孝

はじめに

本小稿は、留学生の送り仮名を含む漢字表記の誤りの実例の分析を通して、彼らが漢字を使って日本語を表記する場合、どのような問題があるかを指摘し、あわせて漢字指導の改善に資しようとしたものである。

1. 誤りの分類方法

我々の最初の関心は留学生の犯した誤りを観察可能な環境の中で記述することである。そのため、我々はまず字形を重視する必要がある。

漢字は究極的には点と線の字画からなるが、漢字の中にはそれらから成るある形（と、それら同士が集まったより大きな形）を（複数）認めることができるものがある。偏や旁は確かに漢字を構成する部分である。しかし、偏や旁でなくとも漢字を構成する部分というのも認められよう。以下、このようなものを「構成素」と呼ぶことにする。「構成素」の厳密な定義や完全なリストの提示は本小稿では不可能だが、そのようなものの存在は直観的に明らかであろう。

漢字の字形上の弁別は究極的な字画だけでなく、このような構成素によっても行われる。したがって、我々は漢字の構成上どこにどのような誤りが起こったかと、誤りによって他の漢字（または構成素）と同形になったかどうかを記述する必要がある。

漢字は、字形、音（音訓）、字義の3つの面を持ち、全てではないにしろ、字形と字音、字形と字義の間に間接的な有縁関係が存在する文字である。訓は事実上の字義と言ってもいいであろう。通常漢字かな混じりである日本語文の表記において、漢字が正しく使用されるためには（正しく使用された漢字を、以下「適字」と呼ぶ）、文が正しく分節されることが前提で、分節された要素の音と意味と漢字のそれとがマッチしなければならない¹⁾。音と意味のいずれにミスマッチがあってもそれは誤りということになる。一方、送り仮名をどのようにつけるかは、原則的に分節された要素の形態論的性質によって決まるもので、漢字の3側面とは関わりがない。

以下、漢字表記の誤りを字形、音（音訓）、字義、送り仮名に分類して考察する。実在の漢字ではない場合、実在の漢字だが音（音訓）がミスマッチの場合、実在で音（音訓）もマッチした漢字だが字義がミスマッチの場合、の順に見ていく。音がマッチしているか

どうかについては、音読みが問題の時は音読みのみを、訓読みが問題の時は訓読みのみを取り上げる。なお、音と字義が関わるのは実在する漢字が使用されたときのみである。また、漢字が異なれば字義も異なるのが原則であるので、不適切な漢字の使用は原則的に字義の誤りでもある。

2. 資料

1991年度前期筆者が担当した日本語上級の1クラスで使った「ニュースで学ぶ日本語（堀歌子他著、凡人社1987年）」の「聞き取り（第1課～11課）」の部分で学生に完成させた（答え合わせを済ませた）後、その全文を漢字かな混じり文に直させたものを資料とした。「聞き取り」は、テープを聞いて下線部を仮名とアラビア数字を使って埋め、スクリプトを完成させるようになったものである。漢字かな混じり文にさせる際、辞書を引いたり、語句の意味について質問をしてもいいことにした。なお、難しいと思われる地名、人名についてはこちらから漢字を与えた。

しかし、以上のようなやり方をしたにもかかわらず、以下の例中には（上記教材の）下線部分または他の部分に音韻上、意味上の把握に誤り—分節の誤り—が生じ、それによって漢字表記の誤りが生じたと思われる例もある。

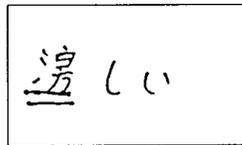
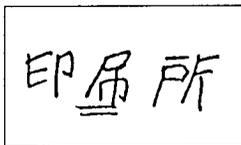
3. 分類と実例

(1) 字形の誤り

① 構成素の誤り

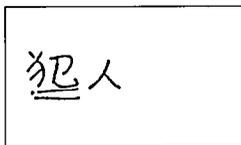
-1 欠落

右：



-2 存在しない形

左：



-3 組合せの誤り

左:

東北地は

窓を破って

爆発

東海道線

煙

被害

右:

類分後には

誕生した

誕生した

教師

中:

簡単なもの

塵源

上:

競争

下:

奈然

右上:

誠言

-4 過剰

左:

遊行に行

上:

簡係がない

② 一に関する誤り

-1 欠落

構成素の最後:

嬉しい

4 連壘

喜ひ

-2 過剰

白っ乙

③ |に関する誤り

-1 欠落

左右構成素の間:

修学旅行

④ ノに関する誤り

-1欠落

下:

上げまさんが

⑤ 、に関する誤り

-1 欠落

構成素の最後:

留守番

哺乳

⑥ 長さの誤り

豆油ストーブ

(唐)め

簡草

⑦ 複合

4 度日

(2) 音の誤り

① 適字とは構成素が異なる

-1 適字に足らない

左:

水野さんの欠男

軍重

金牛で

右:

運魚

火[✓]出_→せ

下:

大丸いナニ

-2 適字と組合せが違う

左:

近項

-3 適字より多い

左:

=階健アハート

足道丸

小物込丸

② 適字とは交わりが異なる

筋: △丸

③ 適字とはいくつかの要素で異なる

東習中

④ その他

歩り書合の

句分北音部

重太となっており

健気い、皆い

言式'言同

(3) 字義の誤り

① 適字とは構成素が異なる

-1 適字より少ない

下:

影郷

-2 組合せが違う

左:

作夜

もと 推 優の

-3 適字より多い

左:

公園を3週

② その他

勢 いた

遭 ~~た~~ した

首都県

進入、乱暴

4止めの優勝

顔などに着いた

夏本盤

必至に頑張った

西洋先から

数分五

日章不足

重おめ

稲咲く

二階立てたハコ

神田戸の調べ

牛連破

試合語

気象題

並控水

際会す

お中の上

交閉しませ

噴かけました

調に(寄)ります

家を寝らな

気が着き

不断は

一か月仕方

(4) 送り仮名の誤り

① 不足

日差が

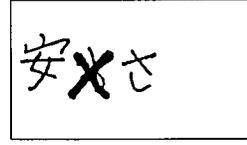
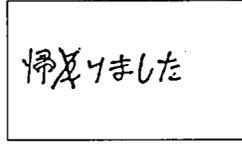
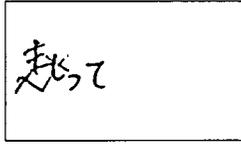
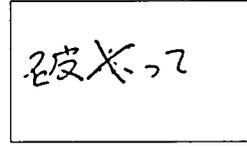
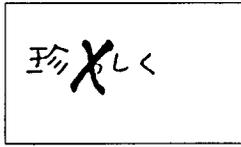
演ましたか

行と

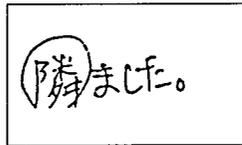
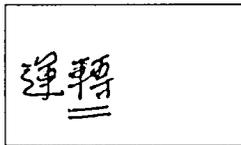
走り書の

調に(寄)ります

② 過剰



(5) その他



4. 考 察

(1)①-1では最後の構成素が欠落していて実在しない字となっている。同-2では左側の構成素が実在しない。適切な構成素との差を、字画の誤り（丶・一・丨・ノ等の欠如、過剰、位置、方向や長さの誤り）に帰すことができない。同-3の誤りは構成素そのものは実在するが組合せがあり得ないもので、指摘した位置の構成素を適切な構成素と置き換えることで適字が得られる。適切な構成素との差は、字画の誤りに帰すことができるか、またはこれに類するもの(A)、3つの構成部分からなっていてそのうち2つの組合せは実在するもの(B)、意味に引かれたと思われるもの(C)があり、それぞれ次のようである²⁾。

A…左：一段目左、中、二段目右／右：一段目右、二段目／中／左／上／下／右上

B…右：一段目中／中：中

C…左：二段目中

同-4では構成素1つ余分で実在しない字になっているが、そのうち2つの組合せは実在する。

(1)②-1では構成素の最後の一画が欠落して有り得ない字となっている。欠落部分の直前に“一”が並行して存在するのは注目に値する。同-2では構成素の最後の一画が余分である。内部に“口”があるのが注目されよう。

③-1では同じ形の丨が左にある。④-1では最後の一画が欠落、⑤-1でも構成素の最後の一画が欠落している。

このように見て来ると、構成素、字画に関わらず、最後のものに関して欠落という誤り

が起こっているのが注目される。また、組合せに関しては、一部正しい組合せにも関わらず全体として誤りという事態が起こっている。さらに、同じ形の画が前にあるときの欠落、他の構成素と同じ形にしたための誤りもある。

⑦では最初の一画の欠落と最後の構成素に過剰の一画が起きている。

(2)①の誤りは字形の上では(1)①の誤りと基本的に同じである³⁾。ただ、同一右の「火出され」の「火」と同一3の「込れ」の「込」は、字形と意味の有縁性によって適字と意味上の類義関係が成立している（前者には送り仮名の誤りもある。）また、同一3の「健」は字形と音の有縁性によって適字と音読みで同音である。

(2)②は「入」と「人」の混同である⁴⁾。

(2)④は「歩」と「走」の取り違えと、残りは分節の誤りである⁵⁾。分節の誤りは、「重大」の「大(体)⁶⁾」、「健気」の「健(元)」のように、分節開始の場所は正しいが、1分節に誤りがあるもの、「何分(南部)」のように不必要な音が挿入された数分節にわたるもの、「試合同」の「同(後)」のように音が置き変わってしまっているものがある。ここで、「重大」と「重体」は「重」が共通で意味も類似していること、「健気(ケンキ)」という語はないが「健」に「元気」の意味があることを指摘しておきたい。

(3)②は当て字的間違い⁷⁾だが、中には「多勢(大勢)」、「進入(侵入)」、「連破(連覇)」のように、適字による熟語と使用されている漢字が一部共通で、かつ意味的に近いものもある。また、「着く(付く)」、「噴く(吹く)」は適字によって表記されても語としての区別はないが、意味の微細な差を表すために表記上書き分けるという決まりが守られていないのである。さらに、「立(縦)」、「お中(お腹)」の「中」は、適字の読み方の由来に合致している。なお、この中には「寄り(依り)」のように通常平仮名にするものもある。

このように、(2)、(3)では意味や音が同じか類似した漢字が誤って用いられるということが起こっている。(2)①ではこれに加え構成素の不足や過剰も同時に起きている。なお、分節の誤り((5)のそれを含む)は、少なくともその一部は「聞き取り」という資料の特殊性によるものであるが、全てをそれに帰すことはできないように思える。また、他の種類の誤りにも資料の特殊性が現れているかは検討を要する問題であろう。

(4)①では連用形(およびそれからの転成名詞)と終止形の活用語尾が表記されていない⁸⁾。同②では最初のを除いて漢字に一モーラ分の読みが余分に当てられている。

(5)は旧字体と分節の開始の場所の誤りである。

5. 漢字教育への示唆

3節でみたように、誤りの種類はさまざまだが、4節の分析から、漢字教育について特に次のような示唆が得られる：

① 字形を正確に覚えさせることはきわめて重要である。特に、a)最後の字画、構成素を

おろそかにしないよう気を付けさせるべきである。b)字形の一部が共通の漢字の区別に気を付けさせるべきである。c)同一形態の字画が先行しているとき欠落しないよう気を付けさせるべきである。

- ② 字形の一部が共通することによって類義関係、同音関係にある漢字の区別に気を付けさせるべきである。
- ③ 使用される漢字が一部共通の類義関係にある漢語の区別に気を付けさせるべきである。
- ④ 多義語の意味を漢字で表記し分けることができるようにさせるべきである。これは、語の同一性と同時に、そこに多義性を認めなくてはならず、学習者の日本語語彙の習得度と関連の深い問題である。
- ⑤ 送り仮名の原理を習得させるべきである。これは語の形態論的性格の習得と関係がある。

おわりに

以上、日本語学習者の漢字表記に関わる誤りの実例を分析を通して、漢字教育に示唆するところを述べた。漢字の教育は漢字そのもののみならず、日本語の語彙の形態論的性格の習得とも関わっていることを見た。

しかし、漢字教育の重点課題は何か、という問には、誤りの統計的処理が必要で、本小稿はそれに答えることができない。また、本小稿で示した例が誤りの全てのタイプであるとも言えまい。さらに、資料の特殊性が出ていることは否定できない。今後より妥当で大きな資料による誤りの記述と統計的処理が必要であろう。

注

1. 熟字訓はこれに当たらない。
2. 左：一段目右、二段目左もおそらく(A)に入れていいだろう。「字形の類似」という概念は非常に曖昧なので、本小稿ではそれを誤りの分類項目には立てなかった。最終的にそれを持ち出す形になったが、やむを得ないかもしれない。
右：二段目について、「師」と「市」は字音が同じであり、「師」の右の構成素と「市」は初めの一画(丶)が違うだけである。
3. 誤りが起こった場所について、(1)①と(2)①では差があるようにも見えるが、それが有意かどうかは今の所不明である。なお、左：中は最初の部分だけを問題にする。
4. 前半部はオリジナル自体が不明瞭で、「人」の部分だけを問題にする。
5. 一段目中は「何分」、二段目中は「同」だけを問題にする。
6. () は適字。以下同じ。
7. 一段目中は「遭」、八段目右は「寄」だけを問題にする。なお、七段目中は「再開」が正しい。
8. 二段目中は「調」だけを問題にする。